

平成28年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻9月号(通巻66号)

風土



9

若狭の瀬音

南うみを

浮苗を挿しに教頭もどり来る

畝打つ一午前六時の玉の汗

嘴におはぐろの翅はたはたす

まくなぎのくづれんとしてくづれざる

形代をまづ禿頭に出つ腹に

あをあをと雨粒撥ねて茅の輪かな

蟹ほろとこぼれて雨の茅の輪かな

絹を裂く音を佳境に夏祓

みなづきやひしめく鯉の腹黄ばみ

若狭なり観音に逢ひ滝にあふ

葛ざくら若狭の瀬音とこしなへ

青田風荃太々と動かざる



竹間集

同人作品



大山蓮華

小林 共代

大山蓮華卵開きに弥陀の声
銀輪の一団過ぎる麦の秋
抜け道の一つは湖へ蛇苺
尼寺の廻廊昏し虎が雨
七重塔礎石を守る瑠璃蜥蜴
噴水に来て浴びる児と逃ぐる児と
梅雨晴間口ほど仕事捗らず

あめんぼ

中根美保

朝涼や楠のそよぎは下枝より
茅の輪抜けすこし見えくる森の道
舟運の水やあめんぼ大ぶりに
川に向き開く茶店や花あやめ
花菖蒲萎れし花に日のぬくみ
梅雨晴の一日に太る榎櫃の実
夏椿はじめの花を風に伸べ

海 月

間島あきら

花檣 小泉 八雲 略年 譜
紫陽花や石屋の土間のくぼみ跡
夏至今日の銀一色の手術室
萍や水に日のある淋しさよ
父の日の余白真白きカレンダー
新茶汲む浸れる史書の眼を転じ
海月浮く海月にうしほ人に時

夏の月

宮川みね子

ガラス切る音まつすぐに五月来る
初夏のわさびのききし昼の膳
麦の秋赤きバイクの郵便夫
うぐひすの眩く坂をのぼりけり
暮れてきしせせらぎの音著莪の花
うぐひすや亡夫の手ずれの謡本
夏の月おほかた退きし通夜の客

今年竹

浜 福恵

高々と君が白寿の菖蒲葺く
福田園草さんの白寿を祝し
蒼々と雄島祭の潮満ち来
祭の島へ二艘仕立ての舟の水尾
枇杷甘し遠き記憶の海に来て
峡を吹く風の高きや今年竹
月の出を雲に包まれ桜桃忌
三浦口城の善悪の墓
句碑のま下に來て絢爛の毛虫かな

明 易 し

門 伝 史 会

どこの田も水ゆきわたり明易し
「岩がらみ」東慶寺に列なす人や梅雨晴間
老鶯や青郵便塚苔むせり
紫陽花のそれぞれ藍を違へをり
きりもなき母娘の会話さくらんぼ
一片の陰りも持たず水中花
留守番の犬に声かく麦の秋

「老樹」以後(二十九)

野沢しの武

初浴衣机に正座してみたり
落し文人が拾へば氣にもして
田植糸まだ終わらぬ喪家半夏生
山頂に火を放ちたる躑躅の緋
海霧沖まで男ぼつりと津波言ふ
虫干や吾には亡父のものもう無き
樹上に蟬鳴かして吾は空蟬よ

月涼し

鈴木石花

をちこちの十五人寄る麦の秋
献杯と乾杯兼ねて冷し酒
二次会の席まで歩く雲の峰
若き日の話は尽きず紅薔薇
夕焼けに染まる高層ビルの群
駿台の校歌斉唱緑の夜
来年の同日約す早苗月
明日の予定組みて一人の宿浴衣

結葉や明史夫妻に逢ひし宿
タクシー待つ櫓通りの緑陰に
五十年前通ひし杜にかたつぶり
蜘蛛の囿を潜りかつての句座探す
引き際のそびらより音落し文
初蟬や黄泉の誰彼うかぶ杜
境内に梅雨入りを明日の骨董市
花園神社見ゆる茶房に氷菓食ぶ
行き付けし「酔心」の昼初鯉
夫へ買ふ水打つ店に「苔」の本
茶道具屋「一色」店主に風炉茶給ぶ
忘れじの駅東口月涼し

山河集

同人作品



南うみを選

つんのめる網戸の車輪梅雨寒し
鳥籠の鳥逃げて行く青嶺かな
軽鼻の子の後ついて行く三輪車
香水やガラスの壁のラジオ局
アルゼンチンタンゴ玉の汗放つ

中嶋 陽子

葎の中の気配は声に行々子
明日あすと伸ばす一事や明易し
老鶯の讃歌あまねし切通し
空港より曲はヨーデル麦の秋
麦秋やホルンの響く国に入る

落合 絹代

被災地にまだある瓦礫草いきれ
山国の黒穂の麦を刈り急ぐ
闇を裂くねぶた形相手振鉦

伊藤 紫水

花火待ついつもの位置に丸太椅子
被災地の君影草の白極め

渡辺 やや

忌に集ふ仏間少々黴臭く
在来線またひとつ消え青嵐
その後の事には触れず夏見舞
梅雨曇り料金不足の封書来て
梅雨晴間百年の樹のかぶさり来

内藤 静

鯉跳ねて噴水高くあがりけり
麦秋や葎を支へて梁の古る
青嵐天守にいます摩利支天
葎切の騒ぎ大利根ささ濁り
蜘蛛の罫を誉めたる後は打ち払ふ

青嵐少し遅れて葬の客 豎山道助

追伸に一言本音さくらんぼ
海二つ越え来し吾子の夏帽子
噴水を止めて終電車で帰る
ビル拭いて新宿の夏輝かす

仕込み桶の醤油つぶやく菝雀 川田好子

万葉仮名刻む碑青嵐
鎌倉に尼寺一つ額の花
夏至の日や大川のぼる浚漉船
麦の秋移動スパー村めぐる

行々子水軍の地に浮御堂 岡本尚子

梅花藻や武尊の毒を吸ひし川
夕風に淡海揺れゐて行々子
生の井戸黄泉の井戸とや滴りぬ
栗の花蛇乾かずに夜に入る

さくらんぼ生後二日の大あくび 岡尚

海の色かくして安房の夕焼
灯台へ岩がくれゆく白日傘
組み替へる足の長さや夏帽子

川風や麻の暖簾に「あめ」の文字

茅花咲く遠きひかりの風の中 水井千鶴子

鎌倉の十六井戸や滴れり
みちのくは父の故郷植田風
てのひらに昔がありぬさくらんぼ
夏至の日の写経文鎮二つ置く

吉野葛とろりと口に春惜しむ 土井ゆう子

メロン切り晴れの気分の湧いてくる
葛桜逢へば安らぐ人なりし
新緑の社出でくるベビーカー
郭公に応へるごどく深呼吸

蛙鳴く遠祖は弥生時代から 杉本葉王子

槿咲く車内清掃五分以内
財産は無形もあるぞ十葉干す
七夕の短冊の文字「薫習」と
強きかな崖の上まで葛の花

◇特別作品◇

村邑

伊藤 紫水

純白の地に初鴉の句読点
山彦のそばに来てゐる山始
後ろから小さなノック雪女郎
瞑且をするまでもなく雪籠
凍解けて牛小屋牛の臭ひかな
新館の第一歩より春の泥
畦を焼く田の神さまの通り道
からたちの花に棘ある回復期

田を植ゑて碧落鏡の消えにけり
太陽のぬけることなく大青田
神池に「清少納言」てふ菖蒲
あめんぼの旋回影を引き連れて
村 邑 の 天 は 原 色 涼 新 た
鉦山のありし村なり大花野
一両のローカル電車秋暑し
丹念に米価下がりし稲を刈る
初 冬 や 篤 農 家 に も 核 家 族
境界の界の見えざる雪を搔く
山 峡 の 氾 濫 し た る 川 枯 れ て
去年今年明治を打ちて振時計

風土独語／南 うみを



アルゼンチンタンゴ玉の汗放つ

中嶋 陽子

コンチネンタルに比べ、激情的で哀感があり男女が激しいリズムでダンスするのがアルゼンチンタンゴです。作者はその様子を「玉の汗放つ」の「放つ」で見事に映像花しました。読み手に見えるようにことばを使うのは俳句表現の基本です。

薫風や檻いつばいに孔雀の威

直井たつろ

孔雀が綺麗な羽根をいつばいに広げています。爽やかな薫風のせいでしょうか。求愛のためでしょうか。綺麗なことは綺麗なのですが、檻の中というところと哀しみがありません。これも印象明瞭な世界です。

竹皮を脱ぐや野太き声変り

渡辺 やや

男子は少年期から青年期に移る時、声帯の変化で声が変わります。「野太き」ですので低い声です。この句の面白さは「竹皮を脱ぐや」との取り合わせです。竹がずんずん伸びる様子と、「声変り」とイメージを重ねながら、「脱ぐや」と畳みかけたところが見事です。中七の「や」は「するやいなや」の「や」です。

霞の中の気配は声に行々子

落合 絹代

この句の良さは、「気配は声に」と、はっきりしないものから霞切の声と感受するまでの繊細な感覚をことばに定着させたことです。眼や耳を相手に感情移入しないと掴まられません。

被災地の君影草の白極め

伊藤 紫水

「君影草」は鈴蘭の別名です。被災地は地震や津波による東北の被災地です。作者は「鈴蘭」と置かず「君影草」としました。私たちはこのことばにより、亡くなった「君の面影」を重ねます。その花が「白極め」ているのです。作者は「君影草の白極め」に鎮魂の想いを籠めているのです。

不如帰溪の深さを知らし召す

森屋 慶基

日頃から自然に目を向け、耳を傾けていないとこのような世界は出せません。南からやってきた「不如帰」が鳴き出しました。作者はその到来を喜んでいきます。そして声の響きから深い溪谷で鳴いていることを察知するのです。「知らし召す」に、作者の「不如帰」に対する謙虚さがうかがえます。

蓮咲く美は乱調にありといふ

杉本葉王子

この句は蓮の花の美しさを描くのではなく、「美は乱調にあり」と打ち出すことで、読み手に雑然とした蓮池の花の様子をイメージさせます。蓮池の花の在り様を作者が描くのではなく、読み手に描かせるのです。この表現法も大事です。(以下略)

風土集

南うみを選



薫風や檻いつばいに孔雀の威

川崎

直井たつろ

スキップで少女駈けくる梅雨晴間

一陣の風が盗める夏帽子

でで虫やふと思ひ出す童歌

倉敷の掘り割り青し夏燕

膝少し崩して待てり夏座敷

宇治

渡辺やや

畳目を頬にうつすら昼寢覚

竹皮を脱ぐや野太き声変はり

青葉光神馬の長き睫毛かな

サンゲラスかけても強きこと言へず

横手

森屋麿

ゴンドラの吊られしままに灼かれをり

老鶯の湖統ぶるがに声猛る

山神の小兵なるかな墓

不如帰溪の深さを知らし召す

開墾の田畑梳き来る青やませ

暑からん東京二千二十年

川崎

堅山道助

どこまでを武蔵野と呼ぶ青嵐

田水沸く真下を走る送油管

赤道を跳ねて越えたり夏帽子

あの日から母は唄はず行々子

パソコンの手を休めをり遠蛙

京都

杉本葉子

蓮咲く美は乱調にありといふ

田の緑風をみどりに染め上げて

軒先に子燕並ぶ過疎の村

父の日の贈り物は何大吟醸

目じるしに結ぶハンカチ旅鞆

東京

奥田茶々

手漕ぎ舟で渡る教会青嵐

一粒で恋に陥るさくらんぼ

幾たびも国境越ゆる麦の秋

城壁の片蔭弦楽三重奏

万緑に城門白く佇ちぬたり

舞鶴

福田 圓草

ほととぎす備前長船耀けり
草笛の高音が止まり在の宵
生くるため風の青葉が酸素撒く
てのひらの宇宙同胞蚩飛ぶ
浜風に乗りにて青条揚羽かな

いわき

佐藤 すすこ

潮風の少し重たき吸葛
薬師門へ紫陽花の道額の道
海見ゆる街道茅花流しかな
かはたれの高き産声青あらし
グーとグー当てるあいさつ日焼の子
白線を引くポンポンダリアまで
夕虹やバトンを飛ばしくぐらせて
父の日や女のかぶるパナマ帽
滴りにコロボックルの集まりぬ
春あけぼのやうやうこころ目覚めけむ

三豊

磯崎 啓三

咳をするひとりひとりの春寒し
春寒し小川のめざす瀬戸内海
晩春の薄暮に白き障子かな
春昼や土間にひそめる家の霊
鮎を焼く民話の里の丸木小屋
藩邸の百彩誇る濃あぢさゐ

大和

落合 絹代

古歌の名の橋や小径や風薫る
江ノ電のこれよりは海立葵
小田原提灯かかげ北条五代祭
紫陽花や潮さし入るる浜離宮
とげぬき地藏ひたすらなづる夏帽子
迷走の黒蟻一つ夜の厨
ガキ大将見ぬこと久しきくらんぼ
時の日の時裏返す砂時計
何のいさかひ梅雨鴉よく鳴ける

五條

上辻 蒼人

山ばかり映して郷の青田澄む
山蚩俳聖殿に隠れけり
山蚩翁の魂も連れてこい
純白や器量良かりし羊草
六月の自販機に買ふみくじかな
白南風や巨大ロケット地に置かれ
封筒のふくらみ届く麦の秋
夕映えを沼に沈めて行々子
梅雨の月潜水艦の浮上せり
旅なれや木曾の山川風青し
ほととぎす千枚の畑鳴き渡る
若き日の父の遺影のパナマ帽
一輪車こなす少女や麦の秋

川崎

森田 節子

川崎

水井 千鶴子